

氏 名	楊 聰
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第255号
学位授与の日付	平成15年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科行動文化学専攻
学位論文題目	中国における流動人口の社会変容

論文調査委員 (主査) 教授 松田素二 教授 寶月 誠 助教授 田中紀行

論文内容の要旨

この論文は、社会主義的諸制度に資本主義的な生産様式が接合されつつある現代中国社会におけるダイナミックな社会変化の一面を、農民の都市出稼ぎ現象を題材にして、社会学的に解明したものである。社会主義市場経済の名で知られる今日の中国社会の構造変化を、ミクロな個々人の選択と実践に焦点をあてて、ある農村共同体の悉皆調査を用いて分析することが基本的な本論の目的である。

中国社会が市場経済への改革をすすめるなか、1980年代末、農村部から都市部への大規模な人びとの流動が生じた。人びとの交通、移動がさほど自由に行われていたわけではない当時の中国においてこの現象は、「盲流」と呼ばれ、深刻な「社会問題」としてみなされてきた。その後「改革解放」の経済政策が順調に進展するにつれ、これら農村からの出稼ぎ労働者たちは、経済発展を都市社会の底辺で支える単純労働力として次第に評価が与えられていくようになる。

このような出稼ぎ者にたいする社会的評価の転換に対応するのが、古典主義的アプローチによる近代経済学の分野からの研究である。この研究は、農村人口の向都離村運動は自発的な行動ではあるが、決して盲目的なものではなく、彼らは「経済的理性」にしたがって農業労働の低収入と都市での出稼ぎ労働での現金収入を合理的に計算し行動しているとすると捉えるものであった。こうした研究の観点に立てば、出稼ぎ者の増加による治安の悪化や犯罪といった社会問題は、出稼ぎ者の都市への定着を妨げる、中国社会固有の戸籍制度や社会政策に直接的な原因があり、これらに対する制度改革を実行することによって、中国社会の近代化はスムーズに実現するとされる。

しかしこのパースペクティブでは、農民つまり潜在的都市出稼ぎ者を、合理的に最大利潤を追求する「理性的経済人」として、無条件に想定しているところに最大の難点がある。これに従えば、西欧型の近代社会モデルを模倣する形で制度改革をおこなえば、現在直面している社会問題は基本的に解決されると考えてしまうことになるからだ。これでは、近代化の潮流のただなかにおかれた流動人口がどのように社会変化に対応して、彼らのおかれた生活環境や人間関係を改変修正する生活実践を積み重ねていくのかといった領域は見えてこないのである。こうして「理性的経済人」のモデルに合致しない多くの側面は見逃されたままになってしまった。

それに対して、本論では異なる視点を提唱し実証している。すなわち、流動人口の都市社会での生活実践に着目し、都市へと流入してきた出稼ぎ者が、制度的な就業形態やフォーマルな労働力市場とは異なった個人的で微細な人間関係のネットワークを築きあげることによって、創発的な社会秩序を生成していることを明らかにした。このような研究では、都市のスラム社会における出稼ぎ者たちの内部関係、職能グループやネットワークが注目され、彼らの都市社会における行為の創造性に力点がおかれている。

またいっけん伝統的な社会関係や規範に注目しながら、まったく別なアプローチも出現している。それによると、流動人口の相互援助の組織やその内部関係のさまざまな形式—グループ、ネットワーク、集中居住地—は、伝統社会とは無関係に、都市で最大の利益を追求するために作り上げられたとされる。これらの研究もまた、出稼ぎ者の都市生活での合理的選

扱を重視する点で、「経済的理性」に駆使される流動人口論に分類できる。これら「経済的理性」を想定する流動人口論は、出稼ぎ者と農村との紐帯を認めない。伝統は「経済的理性」にしたがって発明され使用される文化装置に過ぎず、流動人口が市場へ向かう中での農村の変容、その変容が流動人口にどのような影響を与えるかについて、正面から取り上げることはないのである。

先行研究のなかには、「起点の平等」「機会の均等」というスローガンを掲げて過剰な農村人口問題の解決を訴えるものがある。そのとき、具体的な施策として、都市住民と平等な労働の権利と失業時の社会保障の付与が取り上げられる。しかし現実には、世界最大の人口大国である中国の過剰人口とそれをまかないきれない資源とのあいだに生じる緊張関係は、人口の自由流動、権利と起点の平等についての制度的な実現を困難にしており、都市に参入した流動人口は、不利な立場のまま都市住民とのあいだで競争を強いられている。自らの労働力のみを商品として、あるいは小売販売や移動屋台などで生計をたてる出稼ぎ者のほとんどは、大型機械工業、ハイテク産業、第三次産業といった経済発展の主力産業ではなく、むしろその「周辺」で生きのびているのである。

このような不安定な都市生活のなかで、また都市に定着できないまま農村との往復を繰り返すという生活のなかで、大多数の出稼ぎ者は、自らの社会保障のためにも、また心情的にも、農村とのつながりを維持しつづけている。本調査のなかにおいても、彼らの生存実践と社会関係には農村社会の影響が常に認められる。近代化の過程で注目を浴びてきたのは産業化の進行する都市であるが、同様に近代化が進んでいく農村社会の変容にも着目する必要がある。農村の変革の方向性によって、出稼ぎ者と農村の関係、彼らの生存実践、そして価値意識なども左右されているからである。

既存の出稼ぎ研究では、ニッチェ (niche) という概念が流動人口の具体的な生存環境を描写するのに使われるが、流動人口を囲む環境、彼らの具体的な生活状況が、彼らの実践の内容と形式を決定する。「伝統的慣性」にせよ、「経済的理性」にせよ、流動人口の実践の必要に応じて採用されるのである。伝統的な人間関係と文化の活用という流動人口の重要な特徴は、こういった実践の基礎となる出稼ぎ者の生活基盤となっている農村と都市社会、市場システムとのあいだの二元構造をきちんと見極めたところからとらえられなければならない。それゆえ本研究では、特定の農村からの出稼ぎ労働者の生活環境、生存実践を社会学的なフィールドワークの方法で調査し、流動人口の動機、行動、人間関係、イデオロギーと伝統の活用といった問題を、彼らの農村とのつながりという側面に焦点を合わせ、分析していくことを試みた。

以上のような、従来の流動人口研究の理論的問題点と本研究の射程については、第一部理論編において詳述される。第1章は、前述のように、中国における出稼ぎ者研究の普遍主義的解釈の理論的枠組みとその問題点について説明するものだ。第2章では、流動人口（出稼ぎ者）がおかれたマクロな構造的状況にかんして、戸籍制度の歴史をふくめた、現代中国社会における彼らの具体的な生存環境について叙述する。第3章では、出稼ぎ者の構造的状況をおさえたうえで、「経済的理性」に主眼をおく従来の研究の限界と本研究のパースペクティブについて述べる。第4章では、本研究の調査方法の理論的枠組みについて説明する。社会主義市場経済をめざす中国に生じている未曾有の社会変動の一端を、ある農村共同体での全戸悉皆調査をおこない、さらに出稼ぎ者個々人のミクロな生活上の選択実践について、フィールドにおける参与観察をとおして記録、分析していく方法を採用する。

第二部は調査編である。中国の南西部にある四川省は、「人口大国」中国における「人口大省」と呼ばれている。1980年代の末に爆発的に始まった大規模な人口の流動現象は、基本的に、中西部の農業地域から東部沿海地域の近代工業の密集地域、「改革開放」の最前線への流動であり、そのなかで四川省からの流動人口は最重要部分をなす。本稿の調査地域は、四川省（より正確には重慶特別市）合川県に属し、そこでは労働力の県外への輸出は、県の振興策の一つとして位置づけられている。

事例調査の対象地として選定されたのは、合川県内にある沙漁鎮、開元村の第六社である。第5章においては、合川県沙漁鎮の環境、生業、歴史、交通等の面からの概略、および開元村、第六社の歴史、環境、社会構造等について詳述する。この山村内部の人間関係の基盤は、氏族関係、親戚関係、近隣関係と村人同士の関係とから成り立っている。当地域では1979年、「改革開放」政策の導入とともに、いわゆる「包産到戸」の改革が実施された。土地制度改革が喚起した農民たちの生産性への情熱は、その人口に比して限られた土地にたいして、持続的に労働力を投入することに向けられることになった。すべての土地を耕していく人びとの努力により、その後（「人民公社」時代のような）飢餓の心配はなくなったが、しかし

このような農村における生産状況は、ギアーツのいう社会の「内旋」状態にあるといつてよい。

第6章では、この四川省の山奥の村に訪れた変化の波、大規模な労働力の流出の始まりについて見ていく。この村の出稼ぎは1990年のアジア第10回体育大会（北京）の建設工事にむけた労働力募集によって本格化する。1992年に鄧小平による「南巡講話」が発表されると再び「改革開放」に拍車がかかり、人口流動も激増する。現時点での第六社からの出稼ぎ労働者の分布状況は、広東省の40人を最多として、7省3市にわたっている。

第7章では、出稼ぎ者たちの都市社会での相互ネットワークと、そのなかで観察される彼らの社会変容について、具体的事例をあげつつ分析する。出稼ぎ者たちが初めて出稼ぎ生活に踏み込むときには、村において伝統的に正統化されてきた「身内」の人間関係を利用する。その後、より都市社会に適応しそこでの合理的な利潤追求をめざすとすれば、都市社会での新しい人間関係をより重視し、農村での伝統的関係は希薄化するとも予測されるが、実際にこれまでの調査のなかでは、出稼ぎの生活が続けば続くほど、「身内」の伝統的な人間関係がいつそう緊密になるという逆説的な現象が目立つ。具体的には、はじめに利用した親戚関係、さらに出稼ぎ生活のなかで形成された村的人間関係にそって、家族、親戚、近隣村人との関係を中心にしたいくつかの拠点が出来あがっていく。出稼ぎ者のあいだでは、それらの拠点を軸にして、多重の人間関係のネットワークが形成されている。これらのグループとネットワークは、彼らの都市生活の基盤となり、仕事探しや情報交換に最大限活用される。

都市へ移入してきた出稼ぎ者たちにとって、従来の伝統的な人間関係は重要な社会資源となる一方、資本主義的経済論理が通用する都市社会で実際に生活していくなかで、これらの伝統的な人間関係はさまざまなかたちで社会的変容を被らざるを得ない。本論文の調査対象者でいえば、出稼ぎ者たちにとって都市での世話人的役割をもつ人びとは、このような伝統的人間関係と都市社会の論理のはざままで引き裂かれるアンビバレントな存在としての側面をもつ。彼らは出稼ぎ者なかにおいて成功者である一方、都市社会においては非常に周辺的な存在である。そのため彼らは、都市社会のルールへの従属を要求されていると同時に、伝統的農村的な人情、道徳などへの配慮をも要請されているのである。一般の出稼ぎ者と世話人の双方にとって、都市社会の論理も、伝統的人間関係とともに、単一の準拠軸ではなく、彼らの生活と生存の必要にしたがって利用され、変容され、再生されていく動態的なものであった。

第8章では、出稼ぎ現象の長期化につれて生じている出稼ぎパターンの変化と農村社会の変容について見ていく。出稼ぎが一般化するにつれ、第六社においても、男女を問わず青年層と壮年層を中心に、総人口の半数近くが出稼ぎにいつている。人口流動が始まり10数年たちかつての若者が壮年になると、子どもの教育や老親の世話といった事情から、一年の大半を遠くの都市で過ごすタイプの出稼ぎから、近隣都市での出稼ぎや季節的な出稼ぎへのパターンの変化が見られる。また彼ら親世代にかわって子どもの世代が長期の出稼ぎ生活へと入っていく。

また農村の現状については、人口に比して土地面積が少ないいわゆる「人多地少」という条件と、農作業の労働効率の低さといった条件は、青年層のほとんどが村を不在にしているにもかかわらず改善されてはいない。逆に農繁期の人手不足の問題が生じている。一方「改革開放」政策のなかで地方政府は税金の他にも、さまざまな名目で農民に寄付金を押し付けるようになっており、現在、農村社会においては、このような農民への経済的な「搾取」が常態化しており、こうした厳しい生活環境のなかで生き抜くためにも、都市への出稼ぎに依存する比重がますます高くなっている。都市における扶助ネットワークの重要資源である農村的社会関係の基盤となる農村社会自身が、都市への依存を強めているという錯綜した関係性がそこには見いだせるのである。

第9章では、出稼ぎ者にとっての農村の位置づけと、将来の展望について考察する。出稼ぎ者にとって農村とは、出稼ぎ生活のための基地であり、ライフサイクルのなかの重要な時期（出産や育児など）を過ごす場所でもある。また出稼ぎ生活のひとつの目標は、農村での家屋の新築のためであった。出稼ぎ労働の目的と農村生活とは切り離せない。都市での出稼ぎ生活のなかでは、医療、福祉、教育といった社会保障が得られない出稼ぎ者にとって、どれほど遠くで働いていても、出稼ぎ生活の安全を保障する最終的な「ホーム」として、農村は守っていかなければならないのである。

また一方で、地方政府によって押し付けられる過重な税と寄付金や、農業収益の低さを考えれば、村で農業を続けていくことのメリットはほとんど見出せないともいえる。しかし、家族のほとんどの成員が出稼ぎに出かけ、村に労働力が足りなくなっているとしても、彼らが農村での土地を放棄することはほとんどない。逆に、出稼ぎの収入で土地の管理を委託するこ

とも多い。このような農村にたいする制度的な抑圧下において、出稼ぎと農村での生活とをともに成り立たせようとしていく彼らの実践のなかに、近代化と都市化というマクロな構造変動期における農民（＝出稼ぎ者）の主体的選択を見ることができる。

都市と農村とに峻別された中国社会の二元構造が、農村からの大規模な出稼ぎ現象を生み出した構造的要因である。「経済的理性」を分析モデルとする従来の流動人口研究においては、社会的な弱者集団としての出稼ぎ者と農村とのつながりや農村社会の変容について、具体的に捉えられてはこなかった。それにたいして本研究では、都市と農村とのはざまを行き来する出稼ぎ者たちの生活実践に着目し、このようなマクロな構造の谷間において、巨大な近代化プロセスと折衝・妥協・葛藤しながら、自らを自律的近代化の主体へと編制していくプロセスを取り出してきた。それは、出稼ぎ者たちにとって、彼らの具体的状況に対峙するなかで活用される「生活の理性」、生活戦略とも呼べるものとして結論づけられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代中国社会の流動性を規定している農村から都市への膨大な人口移動現象を、農村を基点として、ミクロな諸個人と家族の生活戦略という観点から解明しようとしたものであり、世紀の移り変わり期における農村の変容と都市出稼ぎ民の生活世界を記述したモノグラフとしても大きな社会学的価値をもつものである。また本論文が方法論として採用した、一つの農村の全戸悉皆調査による都市出稼ぎ研究は、これまで試みられなかったユニークなアプローチであり、中国流動人口研究に新たな知見を与えている。

1980年代後半以降、中国社会は、社会主義市場経済の名のもとに、急激な近代化・都市化を経験している。とりわけ内陸部の農村から沿岸部の大都市圏に大量に流入する流動人口は、大きな社会問題として認識され、社会学をはじめとする諸社会科学の研究対象とされてきた。

この流動人口問題が中国の学界のなかでとりあげられるようになったのは、この10年足らずの間であった。たしかに、改革開放時代にはいると、社会学的研究の発展はめざましいものがあるが、こうした研究に見られる理論的枠組には、大きく分けると二つの不十分点があった。この不十分点の克服が、そのまま本研究の基本的立場となっている。

まず第一の問題点は、社会問題を政治問題ととらえ、それをとらえる理論的枠組をイデオロギー的に選別していく傾向である。本論文は、さまざまな現実の諸問題を、「政治」や「イデオロギー」問題に一律に還元してしまう態度を批判したうえで、都市で暮らす流動人口の日常のリアリティに即してその生活世界を実証的に解明するという、ミクロ分析アプローチを提唱する。

このアプローチによれば、マクロな構造と制度の上からの改変によって、自動的に生活状況が改善されるという発想は斥けられる。たとえば、都市戸籍制度を撤廃すれば、流動人口の社会問題化を抑制することができるという通説を、本論文はきびしく批判する。都市戸籍制度は、たしかに、都市への人口流入を制限し農村に農民を囲い込む機能を果たしてきたが、こうした中央政府の政治路線にもとづく諸制度がそのまま流動人口の生活世界を規定しているわけではない。現実には、こうした制度を内部から再定義したり微細に修正したりしながら、都市に流入してきた人々は自分自身の生活世界を構築してきた。本論文は、制度を修正再創造する過程の記述・分析を通して、マクロな構造・制度からのみ流動人口を把握しようとする従来のアプローチを乗り越えようとしたのである。

本論文の第二の理論的貢献は、流動人口の人間観（personhood）について、従来の見方を刷新した点にある。これまでの労働移動研究において、なにゆえに向都離村の運動は生起するのかという点について、トダロモデルに代表される強力な見方があった。このモデルは、多様な要因のなかで、都市と農村の賃金格差を最重要な要素として定式化してきた。人々は、農村と都市における期待される賃金の差異を、トータルにかつ合理的に考量して結果的により利潤の大きい選択肢を選ぶというこの見方の基礎になる人間観は、まさに近代社会が指定したホモエコノミクスそのものであった。しかし本論文は、このホモエコノミクスの人間観が、流動人口研究においては当てはまらないこと、経済的に不利益になることをあえて引き受けながら、社会関係を再編成し、都市と農村を連動させた家族のライフサイクルを築きあげていくことを、具体的データをもって実証してみせた。

以上述べた独自の理論的枠組のうえにたって、本論文は、事例研究を通して以下の三つの重要な社会過程を解明すること

に成功している。

本論文の事例研究は、四川省（正確には重慶直轄市域北部）のある山村（開元村第六社）の全戸悉皆調査にもとづいて、第六社から広州、深圳、上海、重慶、北京、成都といった大都市部に流入し不安定な身分のまま、季節労働やインフォーマルセクターに参入していく村人男女を追跡し、彼らの生活設計や思惑を参与観察の手法を用いながら詳細に検討したものだ。彼らは慣れない都市生活において、生活基盤を確保するために、親族・姻族関係をともに拡張し、擬似的な親族関係をつくりあげる。このような事例は移民研究においては頻繁に見られるが、第六社の村人たちの社会関係再編成の特徴は、それだけではなく、都市環境のなかで伝統的人間関係を巧妙にまろごと再生してみせることにある。この具体的過程の解明が本研究の第一の貢献である。

こうして一見、農村共同体的な社会関係の再現が都市社会において見られるようになった。村人たちが各都市において合同し、わずかな経済機会を、多数の親族近隣集団によって分かち合う状況が出現した。本論文はこれを一種の「内旋 (involution)」状態と規定する。第六社からの出稼ぎ民が示す「内旋」状態の精密な記述によって、この研究は、平板な近代化論と伝統復古論に陥ることを免れている。この「内旋」過程の記述が第二の貢献である。

本研究の第三の貢献は、現代農村の変容を、農民と土地との紐帯を基軸にして、農民の生活戦略を明らかにした点にある。中央政府や地方政府から農民一人一人に課される数々の負担金とそれに対処するための創意工夫が、細かなデータによって示されているが、これは現代中国社会の圧倒的多数を占める農民の現実を、包括的かつ批判的に分析したものであり、これだけで貴重な農村社会論となっている。

しかしながら、第六社の経験が四川省や中国全体社会のなかでどのように位置づけられるのかという議論や、農民出稼ぎ民の社会関係構築におけるジェンダー的視点が欠けている点、第一部の理論編における新古典派的人間観の検討の不十分な点などの問題が残っている。にもかかわらず、これらの点を考慮しても、本論文の優れた意義が損なわれることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2003年5月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。